

地図から見る近世日本意識の変遷と「蝦夷地」

著者	米家 志乃布
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	9
ページ	91-111
発行年	2012-03-30
URL	http://doi.org/10.15002/00022649

地図から見る近世日本意識の変遷と 「蝦夷地」

米 家 志乃布

1. 「蝦夷地」と日本の歴史空間

「日本」という歴史空間を考えるうえで、日本図を対象とした地図作製史を概観することは有効な手段である。本稿では、その歴史空間としての「日本」を考えるために、現在の私たちが「北海道」と呼んでいる日本の北方地域を事例として、どのように北方地域が日本の国土に組み込まれて描かれてきたのか、近世期に作製された日本図を事例として述べていくことを目的とする¹⁾。

「北海道」は、明治2年(1869)の開拓使設置までは「蝦夷地」と呼ばれていた。「蝦夷地」とは、『『蝦夷』と呼ばれた人々の住む地域』のことであり、「蝦夷」とは、現在のアイヌ民族と呼ばれる人々の名称とされている。「蝦夷」には「野蛮人」という意味合いがあり、「異民族」「他者」というニュアンスも帯びる。この呼び方は、あくまで「和人」側からの呼び名であり、「蝦夷地」という地域名は、和人の当該地域に対する意識を示すものといえる。つまり「蝦夷地」とは、支配者側である和人にとって、自分たちとは異なる「他者」の居住する「異域」という意味であった。

この「異域」としての「蝦夷地」が「北海道」という古代日本の五畿七道・国郡制を彷彿とさせる地名に変更され、名実ともに日本の国土に編入されるのは、開拓使設置と同年の明治2年である。命名は幕末の蝦夷地探検家として多くの地誌・地図を作製した松浦武四郎である。彼は明治2年に明治政府によって開拓判官に任命され、開拓使の命により、「蝦夷地」を日本の国土の一部として相応しい地名を充てることになった²⁾。

しかし、「蝦夷地」が「北海道」に変更され、日本の国土の一部に組み込ま

れる以前から、近世日本においては、日本図のなかに「蝦夷地」を描く試みがなされていた。本稿では、その具体的な描き方を追うことから、近世日本における日本意識の変遷を明らかにする一助としたい。

2. 日本図における「蝦夷地」の登場

欧米における探検と地図作製の関係において、太平洋上のオーストラリアやニュージーランドの存在が明らかになった後も、日本の北方地域は、「未知の土地」として多くの探検家が関心を寄せた地域であり、地図作製者にとっては長らく地図上の空白地域であった³⁾。

欧米で作製された日本図において「蝦夷地」がはっきりと描かれた最初のものは、元和4年(1618)と同7年(1621)に松前を訪問したイエズス会士のアンジェリスの描いた手書きの地図であるとされる⁴⁾。その地図に描かれた「蝦夷地」と思われる地域は、本州の北側に東西に長い島として存在した。東端を「メナシ」、西端を「テシオ」としており、正確な情報を得ていたとは思われない。その後、ポルトガル人であるテイシェーラ一世が1630年に編集した地図帳のなかの日本部分には「YEZO」と注記された島が描かれていた⁵⁾。

また、太平洋海域にあるとされる金銀島の探索のためにオランダによって派遣されたフリースによって描かれた地図(1643年手書き)には大陸と地続きに描かれた「Yezo」があり、その東側には択捉島らしき島を「State Land」、さらに「Compagnies Land」と記載されている⁶⁾。このフリースの地図は、その後の欧米で作製される地図のなかに描かれる「蝦夷地」の形に大きな影響を及ぼし続け、「蝦夷地」は長らくユーラシア大陸の東部と連続する半島と考えられ続けた⁷⁾。

これにさらに混乱を及ぼしたのは、1717年刊行の「皇輿全覧図」のなかの「黒龍江口図」のなかの「く」の字型のサハリン島である。中国で発行されたこの図が翻訳され、1735年刊行のデュ・アルドの『シナ帝国全誌』に掲載された際、「く」の字型のサハリン島の南に「JEZO」と注記されたフリースの図に基づいた半島の形をした「蝦夷地」があり、さらにその南にはアンジェリスの図に基づいた「JESOGASIMA」が存在する⁸⁾。しかし、1753年刊行の

ダンヴィルの地図では、1745年のロシア科学アカデミー編集のロシア帝国図によるカムチャッカ半島、千島列島の情報が盛り込まれ、本州の北側には東西に長い「JESOGASIMA」とカムチャッカ半島に連なる千島列島、蝦夷地の北側には「く」の字型のサハリンが描かれることになった⁹⁾。

ところで、朝鮮ではすでに1471年に申叔舟によって出版された『海東諸国紀』のなかにある「海東諸国総図」の本州北側に「夷島」という独立した島が描かれている。これが、現存する最古の日本図¹⁰⁾であり、蝦夷地を描いた最初の地図であるとも言われている¹¹⁾。この日本図のかたちは、明らかに「行基式日本図」¹²⁾であり、日本の国土の周辺には、「雁道」「羅刹国」などの「行基式日本図」特有の実在しない地名が存在している。しかし、この「夷島」のかたちは素朴で横に長い扁平な楕円形をしており、島のかたちを描いた地図としては明らかに心許ない。

一方、日本の地図作製史では、「蝦夷地」はいつごろから日本の一部として描かれるようになったのだろうか。先行研究では、桃山時代の日本図屏風（淨得寺蔵）にはじめて「蝦夷地」の一角が現れたとされる¹³⁾。しかし、この日本図屏風には渡島半島南側の一部分が描かれているのみであり、そこには「松前」と注記されているのみである。この日本図屏風の対となる世界図屏風のなかの日本部分には、「夷」と注記された陸地が描かれており、こちらは明らかに「えぞ」と表現されたものと言える¹⁴⁾。しかし、いずれも島の一部分が描かれているのみであり、全体像を詳細に表現したものとして現存するものとしては、江戸幕府が編纂した正保日本図の北方部分が最も古いものとされている¹⁵⁾。

3. 江戸幕府による地図作製と「蝦夷地」

江戸幕府は五回にわたり国土基本図としての「国絵図」の調製事業を行っており、江戸幕府編纂の日本総図は、各藩が提出したこの「国絵図」を基本として編集した¹⁶⁾。国絵図の縮尺は六寸一里であり、蝦夷地部分以外はすべてこの縮尺で統一されている。この「蝦夷地」の部分の地図作製を担ったのは松前藩である。近世初期からの松前藩による「蝦夷地」支配は、当該地域を日

本の国土空間に組み込む契機のひとつになったとも言える。松前藩は、16世紀を通じて渡島半島における和人勢力のリーダーであった蠣崎氏が松前氏と改名して藩主となり、その領地である現在の北海道部分を和人が居住する「和人地」（「松前地」とも云う。渡島半島の南部）とアイヌ民族の居住する「蝦夷地」とに区分した。

正保日本図における松前藩が作製した「蝦夷地」部分の図（現在の北海道・樺太・千島列島）は、「和人地」に比べて縮小されて描かれており、その後の元禄日本図でも同様である。縮尺を無視した松前藩作製の「蝦夷地」の図が幕府によって受理された理由として、ひとつは、国絵図は課税基準としての石高を記載した郷帳とともに提出されたものであり、無石無高の地である蝦夷地を軽視していたからであるという¹⁷⁾。さらには松前藩がアイヌの人々から得た知識や地名に基づいた概念図にすぎなかった、あるいは江戸幕府に蝦夷地が広大であることを知られることを恐れて松前藩が故意に蝦夷地を縮小して描いたとも言われている¹⁸⁾。そして、続く元禄日本図においても、この正保日本図の蝦夷地のかたちは引き継がれた。しかし、天保の国絵図になると、それらをもとにした日本総図は編集されなかったものの、国絵図として提出された「蝦夷地」部分は実測された巨大な図面となっている。これは、18世紀末の江戸幕府による「蝦夷地」直接支配の時期以降、幕府による積極的な情報収集と地図作製が行われたことの結果である。

江戸幕府がそれまで松前藩に一任していた「蝦夷地」に大きな関心をもつようになった理由は、18世紀におけるロシア帝国の東方進出である。17世紀後半には、すでにロシア人によってカムチャッカ半島は「発見」され、18世紀に入ると、1711年コズイレフスキーによる千島列島の調査、1719年のピョートル1世の命によるエフレイノフとルージンの千島列島の探検、さらにベーリングによる第一次カムチャッカ探検（1725～1730年）、第二次カムチャッカ探検（大北方探検、1733～1742年）などによる積極的な探検調査が行われた¹⁹⁾。

日本への影響としては、第二次探検のベーリング調査隊の別隊であるシュパンベルクによる日本への探検調査が重要であろう。シュパンベルク一行は、元文4年（1739）に牡鹿半島の南方になる田代島の沖合で仙台藩士千葉勘七

郎の一行と情報交換を行っている²⁰⁾。また明和8年(1771)にはロシアの流刑囚だったハンガリー人のベニョフスキーがロシア船を奪って逃亡中に土佐、阿波、および奄美大島に立ち寄り、その際に長崎のオランダ商館長宛てに書簡を送った。その内容はロシアの南下を警告し、幕府は警告を無視したものの、長崎の知識人たちに大きな影響を及ぼした²¹⁾。この事件が契機となり、仙台藩医工藤平助の『赤蝦夷風説考』が著され、そのなかで工藤は、ロシアとの交易とその利益による「蝦夷地」の開発を提案した。これが老中田沼意次の耳に入り、江戸幕府がはじめて直接に「蝦夷地」に調査隊を派遣したのは天明5年(1785)である。

天明5年(1785)～6年(1786)にかけてのこの調査の結果をもとに作製された「蝦夷輿地之図」(1786年作製・手書き)では、現在の北海道部分と千島列島の南部分が格段に詳細になっており、樺太も島として描かれている²²⁾。その後、幕府は田沼の失脚により、当該地域への関心を減退させたものの、寛政元年(1789)にはクナシリ・メナシの戦いが起きたことで再び寛政3年(1791)～4年(1792)にかけて調査を実施した。その際、天明年間の調査に参加した最上徳内がエトロフ島に渡り、アイヌの人々や山丹人から様々な情報を得ており、漂流ロシア人からも地図を写している²³⁾。

寛政4年(1792)には、ロシア使節ラクスマンが日本との国交樹立を求めて根室に来航した。その際、ラクスマンが大黒屋光太夫ら日本人漂流者を伴っていたことは有名な話である。幕府はこの時、ロシア側の国書の受け取りを拒否したものの、長崎への入港許可証は発行した。その入港許可書を携えたロシア使節レザノフが長崎に来航するのは文化元年(1804)である。また、寛政8年(1796)にはイギリス人プロートンが日本沿岸の海図を作製するために室蘭に来航し、翌年にかけて日本近海の測量を行った。

ラクスマン、プロートンと「蝦夷地」を中心とした日本北方地域の海防に危機感を感じた江戸幕府は、寛政11年(1799)には東蝦夷地を上知し、直接の「蝦夷地」経営に乗り出した。文化4年(1807)には西蝦夷地と松前藩の領地であった「和人地」を含めて上知し、松前藩を奥州へ転封する(第一次幕府直轄期)。

文政4年(1821)に幕府は一旦蝦夷地および和人地を松前藩に戻したものの、嘉永6年(1853)6月にペリーが来航、翌月にはロシアの全権大使プチャーチ

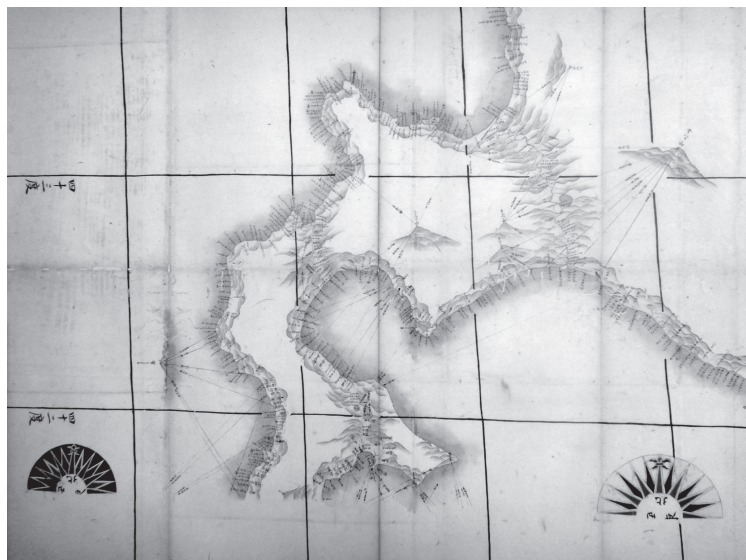


図 1

ンが長崎に来航し、国交樹立を求めたため、再び危機を感じた幕府は「和人地」を除く「蝦夷地」全域を安政2年（1855）に直轄とした（第二次幕府直轄期）。こうして幕府の「蝦夷地」直轄は開拓使設置まで続いた。

ブロートンの来航の翌年にあたる寛政10年（1798）、江戸幕府は「蝦夷地」に3度目の調査隊を派遣した。この調査隊のなかで千島列島の探検調査を行った中心人物がその後エトロフ開発を担った近藤重蔵だった。近藤重蔵が作製した「蝦夷地絵図」（1798-99年頃作製・手書き）²⁴⁾は、「これまでにない優れた輪郭をもっている」地図とされ、それまでの調査の成果や最上徳内らが作製した実測図などを参照して描かれているという²⁵⁾。前述のように、寛政11年には第一次幕府直轄が開始されており、この地域情報の詳細な「蝦夷地絵図」は、幕府による「蝦夷地」経営の基礎資料として用いられたことが想定できよう。

さらに寛政12年（1800）には、伊能忠敬による「蝦夷地」の太平洋岸の測量が始まり、江戸幕府による本格的な「蝦夷地」の実測図作製が開始した。伊能忠敬による蝦夷地の測量は東蝦夷地のみに終わり、西蝦夷地については、伊能に測量術を学んだ間宮林蔵の調査で完成した。また、それ以降も日本各地の



図2

測量調査が行われ、日本図としての完成は文政4年（1821）になる。この測量事業は、まさに「蝦夷地」の第1次幕府直轄期に行われた。この「伊能図」の「蝦夷地」は、これまでの地図にはない正確な輪郭をした北海道部分を見ることができる図である。

図1は、文政4年（1821）頃に作製されたとする「実測輿地全図」の「松前蝦夷」部分（手書き）を示したものである。「伊能図」の場合、海岸線の測量は正確で詳細に描かれているものの、内陸部において空白地域が多いことが特徴である。この空白部分を埋めた地図としては、松浦武四郎が安政6年（1859）に作製・出版した「東西蝦夷山川地理取調図」（木版）が重要である。「伊能図」が第一次幕府直轄期における代表的な地図とするならば、松浦武四郎の地図は第二次幕府直轄期の代表作ともいえる。

松浦武四郎の「蝦夷地」調査は、弘化3年（1846）から安政3年（1856）の6回に及び、後半の3回は幕府の第二次直轄期にあたる。松浦は、幕府御雇に任じられていたため、この調査は江戸幕府の事業として行われた。安政6年に出版された「東西蝦夷山川地理取調図」をもとに、江戸時代末には「官板

実測日本図」(木版)の「蝦夷諸島」「北蝦夷」が発行された。図2は、この「官板実測日本図」の「蝦夷諸島」における渡島半島の一部分である。図1と図2を比較すると、沿岸部および内陸部の地名の記載が図2では大幅に増加していることがわかる。

以上のことから、「正保日本図」「元禄日本図」の段階では、松前藩によって「蝦夷地」の地図作製がなされていたため、「蝦夷地」の地図上での輪郭は、現実とは異なる素朴なかたちであり、その地域への認識も江戸幕府にとってはそれほど重要視されていなかったことが確認できた。しかし、18世紀後半からの主にロシアとの対外関係を契機として、江戸幕府による「蝦夷地」の情報収集が始まったことにより、直接の「蝦夷地」調査が行われたことから、地図作製のレベルも向上し、「伊能図」段階ではかなり正確な「蝦夷地」の輪郭が描かれるようになったといえる。さらに松浦武一郎作製の地図になると、「蝦夷地」の内陸部における地域情報も詳細になってきたことがわかる。

このような国家権力の側からの関心にもとづいた海防・国防的な立場からの日本図の作製においては、それまでは「異域」と認識していた「蝦夷地」部分の情報収集は「日本」の国土空間に組み込むうえでも重要な作業であり、これら一連の「蝦夷地」の地図作製事業はそのような国家的要請の強い事業であったといえる。

4. 近世における日本図の出版と「蝦夷地」

近世日本は、地図印刷技術の発達によって、多くの民間刊行の地図が発行された時代である。幕末には、これらの民間発行の地図は庶民レベルまで普及するようになったと思われる。近世に出版された地図は、世界図・日本図・都市図・旅行案内図など多岐にわたる。これら刊行図のなかでも、主に日本図を取り上げ、そのなかで「蝦夷地」がどのように組み込まれていたのか、あるいはいなかったのかを考察していく。

近世に出版された日本図に関わる研究は数多く存在する²⁶⁾。どの研究においても、日本最初の刊行図として紹介されているのが慶長版『拾芥抄』所収の「大日本国図」(慶長12年(1607))である。このなかに「蝦夷地」らしき

記述はない。しかしこの図は、「一枚刷りの日本図」ではなくあくまで『拾芥抄』の挿図であったため、「一枚刷りの日本図」として最も古いものとしては「南瞻部州大日本国正統図」（寛永年間（1624～44））であるという²⁷⁾。この日本図は南を上には描かれており、典型的な「行基式日本図」のかたちをしている。そのなかの本州のもっとも東側に「夷地」の記述が確認できる。「夷地」の文字は、独立した島のなかには描かれておらず、本州の一部に書き込まれている。このように、「蝦夷地」を本州のなかに描く日本図は他にも存在することが指摘されている²⁸⁾。

一方、前述の『海東諸国紀』のなかのもっとも古い刊行日本図（1471年）では、明確に島のかたちをした「夷島」が描かれている。他に日本に残る図として、刊行図ではないけれども、朝鮮の役の際に加藤清正が献納したとされる熊本の本妙寺所蔵「大明国地図」の日本部分にも「夷島」が本州北側の海域に浮かぶ島として描かれている。この図は、『海東諸国紀』を参照して描かれたとされている²⁹⁾。この『海東諸国紀』は、おそらく日本で描かれた「行基式日本図」を模写したものであると思われるため、15世紀後半には島のかたちをした「夷島」が日本で作製された日本図に描かれていたのではないかと推測できる。

以上、近世初期までの段階においては、本州の一部に「夷地」を描くタイプの地図と本州の北側の海上に島として「夷島」を描くタイプの二通りの描き方が存在したことを確認した。それでは近世を通して、この描き方は刊行図においてどのように変化したのだろうか。

表1は神戸市立博物館所蔵の膨大な江戸時代出版された日本図のなかから、筆者が出版年代のばらつきを考慮して選択し、実際に地図を閲覧の上、「蝦夷地」の記載特徴について確認を行った地図の一覧である。

まず、17世紀の代表的な刊行日本図を見てみよう。寛文2年（1662）発行の「新改日本大絵図」（表1-13）では、「松前」「てしおふろ」「めなしふろ」「えぞのちしま」と記された大きな大陸が地図の東端に横たわっている³⁰⁾。この図では、「蝦夷地」が島なのか大陸と地続きなのか不明である。延宝6年（1678）の「新撰大日本図鑑」（表1-17）は、南を上には描いた日本図であり、北東の端に「松前」と記された渡島半島の南端とそれに続く「恵そ可嶋 長サ上方道三百里」と書かれた地域が連なっている。他にもいくつかの地名が書き込まれており、

表1 刊行日本図一覧

目録 番号	刊行年 和暦(西暦)	名 称	蝦夷・松前の記載の特徴	法量(縦×横) cm	備 考
13	寛文2 (1662)	新改 日本大絵図	「松前」「えぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」	59.1 × 88.3	木版
17	延宝6 (1678)	新撰大日本図鑑	「松前」「恵そ可嶋」周辺に地名あり(図3)	69.1 × 92.5	木版手彩
20	貞享3 (1686)	新板 日本国大絵図	「松前」「夷狄」(図4)	70.8 × 163	木版手彩
38	宝永5 (1708)	日本回国六十六部 縁起	—	27.4 × 300.7	木版
62	宝暦3 (1753)	大日本国大絵図	「松前」「夷狄」	108.8 × 173.5	木版手彩
77	安永年間 (1772-1781)	安永改正 大日本 画図	「松前」「夷狄」(図5)	32.5 × 39.5	木版手彩
83	安永8 (1779)	改正日本輿地路程 全図	「松前」周辺に地名あり	82.8 × 134	木版手彩
95	寛政3 (1791)	改正日本輿地路程 全図	「松前」周辺に地名あり(図6)	85.2 × 132.6	木版手彩
97	文化5 (1808)	大日本細見指掌全 図改正増選	「松前」「ハコ立」などの地名あり	139 × 227.5	木版手彩
128	文化8 (1811)	改正日本図 五采 分図	「松前」周辺に地名あり	44.7 × 61.4	木版手彩
116	天保2 (1831)	銅版 増補日本輿 地全図	「松前」周辺に地名あり	47.2 × 79.5	銅版手彩
117	天保2 (1831)	旅行必用 大日本 諸州道程附全	「蝦夷」「松前」	34.2 × 51.5	木版
148	弘化4 (1847)	銅鑄 日本輿地全 図	「松前」周辺に地名あり	39.1 × 36	銅版手彩
155	嘉永2 (1849)	増訂 大日本輿地 全図	「松前」周辺に地名あり「蝦夷カラフト紙中狭キガ故ニ爰ニ略ス」(図7)	137.1 × 241.8	木版刷彩
163	嘉永5 (1852)	増訂大日本国郡輿 地路程全図 全	「松前」「箱館」など周辺村落の地名あり	104.9 × 186.9	木版刷彩
176	文久2 (1862)	大日本郡国全図 完	「蝦夷」「松前」と周辺村落の地名あり	51.2 × 68.7	木版刷彩
178	文久4 (1864)	大日本海陸全図 完	「蝦夷地」全体の地図あり(図8)	72 × 98.6	木版刷彩
184	元治2 (1865)	新刻大日本路程全 図	「蝦夷」「松前」周辺村落の地名あり	75 × 99.3	木版刷彩
186	慶応3 (1867)	大日本輿地全図	「松前」「箱館」など地名あり	72.4 × 172.5	木版刷彩
181	江戸時代末	南瞻部州大日本国 図	「松マヘ」	36.3 × 49.3	木版刷彩

神戸市立博物館『館蔵品目録 地図の部1 南波コレクション』『日本図』部分より作成

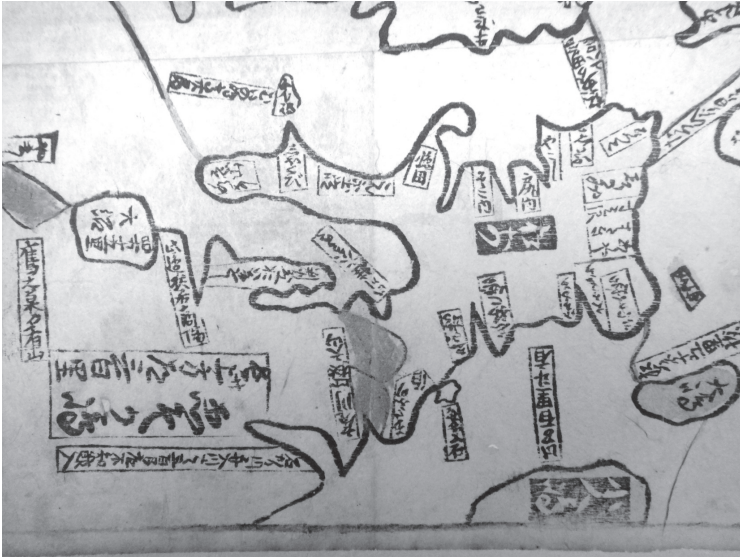


図3

「恵そ可嶋」の隣には「四方十五里 大沼」も見える(図3)。貞享3年(1686)以前に出版されたとする「新板日本国大絵図」(表1-20)では、「松前」と「夷狄」を陸続きとして、地図上の北の端に描いている³¹⁾。

その他、17世紀後半には、浮世絵師の石川流宣による多種多様の日本図が出版され、18世紀後半まで続いた³²⁾。その代表的な日本図である「本朝図鑑綱目」(貞享4年(1687))では、「松前」は「夷狄」と本州の間にある小島として描かれている。一方、18世紀半ばに出版された同じ流宣作の「大日本国大絵図」(宝暦3年(1753)表1-62)および「日本海山潮陸図」(元禄4年(1691))に描かれた「夷狄」と「松前」は、陸続きに地図の北東の端に描かれている(図4)。18世紀後半における他の刊行日本図として、安永年間(1772-1781)作製の「安永改正大日本画図」(表1-77)では、「夷狄」と本州の間に「松前」が島として描かれている(図5)。このように、17世紀後半から18世紀にかけては、「夷狄」と「松前」を陸続きに描いているタイプと「夷狄」と本州の間に「松前」を島として描いているタイプの二通りが確認できた。いずれにしても、「夷狄」=「蝦夷地」と「松前」は明らかに分かれており、これは「松前」=松前藩

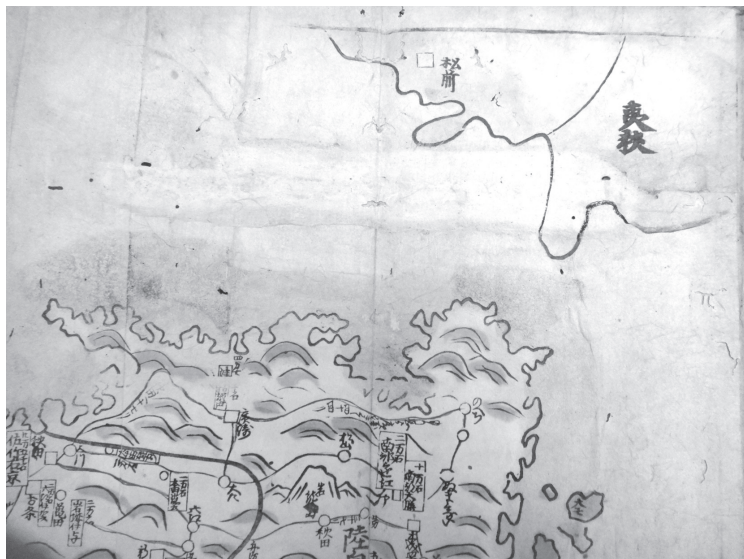


図 4

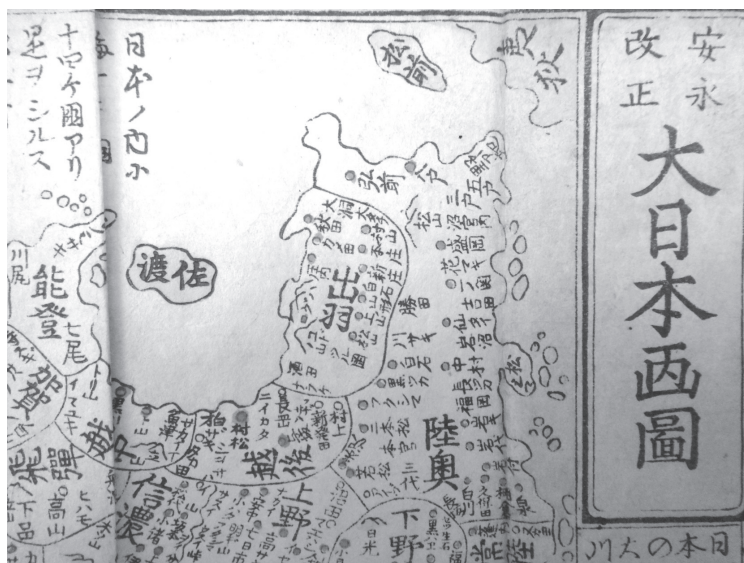


図 5

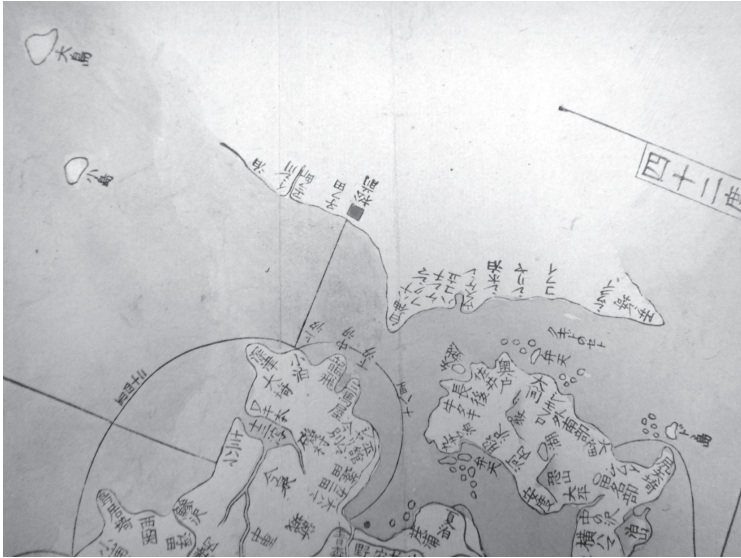


図 6

の領域を表すものとしての表現であるといえる。

次に、18世紀末の刊行日本図として代表的な長久保赤水による日本図³³⁾の「蝦夷地」部分を見てみよう。安永8年(1779)の「改正日本輿地路程全図」(表1-83)、寛政3年(1791)の「改正日本輿地路程全図」(表1-95)などを見ると、「松前」城下の記号が記され、その周辺に地名がいくつか書き込まれ、渡島半島の南端部分のみが描かれている(図6)。「蝦夷地」に関する記載は存在しない。なおこの描き方は、多くの赤水日本図に共通して見られ、嘉永5年(1852)の「増訂大日本国郡輿地路程全図全」にも同様の描き方が確認できる。

なお、長久保赤水は、このような日本図とは別に「蝦夷松前図」(寛政7年(1795)頃)を刊行しており、この図は前述の「蝦夷輿地之全図」をもとに作製・出版した地図である³⁴⁾。しかし、同じ赤水作製の刊行日本図においては、日本図のなかに蝦夷図を組みこむことはなく、あくまで「松前」とその周辺のみを描いていることが特徴的である。

19世紀においては、赤水日本図と同様に、「松前」周辺地域のみを描いた地図の出版が続くことが確認できる。たとえば、文化5年(1808)刊行の「大日



図7

本細見指掌全図改正増選」(表 1-97) や文化 8 年 (1811) 刊行の「改正日本図五采分図」(表 1-128)、天保 2 年 (1831) 刊行の「銅板増補日本輿地全図」(表 1-116)、弘化 4 年 (1847) 刊行の「銅鐫日本輿地全図」(表 1-148) などである。いずれも、図 6 と同様に、「松前」とその周辺を描いているものの、渡島半島の沿岸部分は簡単な輪郭であり、正確な沿岸線を表現しているとはいえない。

一方、当該期において最大の木版日本図とされる³⁵⁾ 逸見豊次郎作製の嘉永 2 年 (1849) の「増訂大日本輿地全図」(表 1-155) では、「蝦夷カラフト紙中狭キガ故ニ爰ニ略ス」と注記されているものの、「松前」を中心とした周辺村落の地名や位置、内陸部の山々の表現、「箱館」や周辺村落の地名や位置など、渡島半島の南端部分が、それ以前の日本図の表現よりも詳細に正確に描かれていることがわかる (図 7)。

また、前述の赤水日本図は、明治期になるまでの間に、赤水図に「蝦夷地」の情報を付け足して発行される改訂版・模倣版が多数存在した³⁶⁾。狂歌作家で絵師である整軒玄魚が赤水日本図に倣って作製したという嘉永 6 年 (1853) 刊行の「大日本海岸全図」には、日本図の北側に「蝦夷国」が大きな附箋で付



図 8

け足されている。この図は、文化13年(1816)の「大日本撰撰三国之図」の「蝦夷国」に模して描かれているとされる³⁷⁾。また、「大日本海岸全図」には、嘉永7年版もあり、それも同様である。しかし、同じ作者の文久4年(1864)発行の「大日本海陸全図」(表1-178)では、嘉永年間版のものとは異なった「蝦夷地」が描かれている(図8)。「蝦夷地ハ大方ノ縮図ニシテ度数ニ因サレハ狭ク地名モ猶少シトイエモ紙中限アレハ略ス」とあり、樺太と千島列島は省略されているものの、「松前」城下とその周辺地域の地名、「東蝦夷」「西蝦夷」「口蝦夷」と蝦夷地沿岸部分の主な地名は書き込まれている。

この「蝦夷地」の形を見ると、翠堂彭による嘉永7年(1854)8月発行の「日本輿地全図」に附箋で付け足された「蝦夷地」と同様のものであると推察できる³⁸⁾。この「蝦夷地」の地図のもととなる「蝦夷図」は、その蝦夷地や樺太(北蝦夷)、千島列島の形や情報量などから、嘉永7年(1854)4月に江戸で発行された藤田良の「蝦夷闔境輿地全図」(嘉永6年(1853)10月の識語あり)に描かれた「蝦夷地」の形に類似しており、この図をもとに作製したことが推察できる³⁹⁾。

ところで、これらの蝦夷図は、嘉永6年末から始まる江戸における蝦夷図の発行ブームともいえる現象があり、そのなかの主要なひとつでもあった。幕末におけるこれらの出版蝦夷図は、天明年間以降、幕府による蝦夷地調査や地図作製で得た情報を盛り込んで作製された蝦夷図の模写や再編集であった⁴⁰⁾。それらの蝦夷図を用いて、日本図に新たに「蝦夷地」を書き加えたものが増えてきたと思われる。

しかし19世紀においても、天保2年(1831)の「旅行必用大日本諸州道程附全」(表1-117)にある日本図のように、「蝦夷」と「松前」を簡単に記載しているもの、あるいは、江戸時代末の出版と推定されている「南瞻部州大日本国図」(表1-181)では、渡島半島の南端が描かれ、「松前」と若干の周辺の地名があるのみである。また、元治2年(1865)刊行の赤水日本図を模したとされる「新刻大日本路程全図」(表1-184)や慶応3年(1867)刊行の橋本玉蘭斎による「大日本輿地全図」(表1-186)などの木版図においても、渡島半島の南端が地図上に描かれているのみであり、「松前」とその周辺地域の地名がわずかに書き込まれているのみである。しかも、「新刻大日本路程全図」は、発行元が江戸・大坂で7名にも及んでおり、幕末の刊行日本図としては人気のあった地図であったことが推測できる。そこには、従来の赤水日本図における「松前」の描き方を変えることはせずにそのまま模写したであろう渡島半島の南端が少し描かれているのみである。

つまり、年代を経るに従って、すべての刊行日本図において「蝦夷地」の地域情報が正確かつ詳細になってくるとは限らず、各地図の種類や用途によってそれらの情報にはばらつきが存在していたといえる。また、これらの地図上においては、松前藩の領地と「蝦夷地」を区別する表現も続いており、人々の意識のなかには、明らかに渡島半島南端にある松前地(和人地)は「日本」であるけれども、「蝦夷地」は「異域」であるという意識が長らく続いていたことが予想できよう。

5. おわりに～日本図と「蝦夷地」

19世紀に江戸幕府の収集した情報をもとに作製された日本図は、幕末・明

治になって刊行されたものがいくつか存在する。たとえば、前述の「官板実測日本地図」は、江戸時代末に幕府の開成所から出版されたものだけではなく、明治3年（1870）に大学南校から出版されたものもある⁴¹⁾。「官板実測日本地図」は、本州、四国、九州に加えて、「蝦夷諸島」と「北蝦夷」（樺太）を「日本」の国土の一部として出版したものであり、この地図表現には、江戸幕府の日本意識を読み取ることができる。

また、明治2年の識語のついた「北海道国郡全図」は、北海道・樺太・千島列島を含む木版刷彩の大型の地図であり、松浦武四郎によって開拓使に答申された11カ国名、86郡名が書き込まれている。この地図には、初代開拓長官鍋島直正、第二代開拓長官東久世道禧、民部卿伊達宗城などの題字・題言・和歌が添えられている⁴²⁾。この図で重要な点は、「蝦夷地」が「北海道」に変化しただけでなく、樺太・千島も単なる「北蝦夷」ではなく、「樺太州」・「千島州」という表現で、日本の領域に組み込まれていることであろう。この地図上のこれらの地域表現にも、明治初期の北海道開拓使が持っていた日本意識を読み取ることが可能である。

一方で、18世紀頃から盛んになる民間における日本図の出版においては、19世紀半ばの嘉永年間頃から「蝦夷地」が従来の日本図の範囲に付け加えられ始め、少しずつ「蝦夷地」を国土に組み込む意識が醸成されつつあるように推測できた。とはいうものの、そうではない従来型の刊行日本図も存在し、そこでは、それほど「蝦夷地」を日本の国土空間に組み込もうと意識されていなかったことがわかる。ここに、江戸幕府などの権力側のもつ地図上での「日本」意識と民間における地図上での「日本」意識のずれを感じることができよう。

今後の課題としては、江戸幕府系の知識人層による日本意識と民間レベルでの日本意識の差異などについて、「一枚刷りの日本図」だけでなく、地誌や節用集などに掲載されている日本地図・世界地図などからも考察して行く必要があると思われる。

（付記）

本稿を作成するにあたり、神戸市立博物館の三好唯義氏・小野田一幸氏に

は古地図の閲覧・撮影に際して、大変お世話になりました。記して感謝いたします。

注

- 1) すでに拙稿において、19世紀の江戸幕府による地図作製と日本の国土の關係に絞って論じたことがある。山田（米家）志乃布「19世紀の地図作製と『蝦夷地』—北上する＜日本＞」古今書院、『地理』47-2、80-86頁、2002年。
- 2) 松浦武二郎が開拓使に上程した「蝦夷地道名国名郡名之儀申上候書付」には、松浦が提案した道名案は「日高見道」「北加伊道」「北海道」「東北道」「千島道」の6案だった。これを素案として開拓使の決定は「北海道」となった（山田秀三監修・佐々木利和編『アイヌ語地名資料集成』草風館、1988年）。
- 3) 日本の北方地域における地図史上の空白について論じたものとして、①船越昭生『北方図の歴史』講談社、331頁、1976年②秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、405頁、1999年などがある。
- 4) 織田武雄『地図の歴史—日本篇』講談社新書、1974年、116-117頁参照。
- 5) 海野一隆『地図に見る日本—倭国・ジパング・大日本』大修館書店、1999年、158-159頁参照。
- 6) 前掲5) 海野著書160-161頁参照。
- 7) 前掲3) ②秋月著書63頁参照。
- 8) 前掲3) ②秋月著書92-93頁参照。
- 9) 前掲5) 海野著書166-167頁参照。
- 10) 前掲4) 織田著書29頁参照。
- 11) 前掲3) ②秋月著書12頁参照。
- 12) 「行基式日本図」とは、「日本の国々が倭のなどをならべたような形に画かれ、従って日本全体の輪郭すなわち沿岸線が丸みを帯びた簡単な曲線のもの」であり、「日本図中に記入されている文字は国々名とその当時の郡数、田数だけ」、そして「行基によって作られたものである旨を記している」とある（秋岡武次郎『日本地図史』河出書房、1955年、154-155頁参照）。また、行基自作の日本図が現存していないことから、「行基が描いた地図ではなく、行基という有名な仏僧の名前を借りる形で後世の人々があたかも奈良時代にその図があったかのように見せかけたある種の「古図」なのだ」とも述べられている（京都大学文学研究科地理学教室・京都大学博物館編『地図出版の四百年』ナカニシヤ出版、2007年、35頁参照）。
- 13) 前掲4) 織田著書50頁参照。
- 14) 前掲5) 海野著書152-153頁参照。
- 15) 前掲4) 織田著書118頁参照。
- 16) 国絵図研究の最新成果として、国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房、2005年が重要である。
- 17) 海野一隆『地図の文化史—世界と日本』八坂書房、2004年、136-137頁参照。
- 18) 前掲5) 織田著書118頁参照。
- 19) 前掲3) ②秋月著書「第Ⅳ章ロシア人の千島地図」71-82頁参照。
- 20) 前掲3) ②秋月著書「第Ⅴ章北辺地図の進展と新たな空白」98-112頁参照。
- 21) 前掲17) 海野著書162-163頁参照。
- 22) 前掲3) ②秋月著書151-153頁。なお、長久保赤水による「蝦夷松前図」（1795年刊行）は、赤水が「蝦夷輿地之全図」に基づいて木版で刊行したものである。
- 23) 前掲3) ②秋月著書157-158頁参照。
- 24) 大日本近世史料『近藤重蔵蝦夷地関係史料付図』および『同別冊』によれば、本図

- は写図もしくは下図であり、作製年代は寛政10年の蝦夷地調査を踏まえたうえで寛政11年正月の東蝦夷地上知までの間に完成したとされる。
- 25) 前掲3) ②秋月著書216-222頁参照。
 - 26) 日本における刊行日本図に関する主な研究としては、①秋岡武次郎『日本地図史』河出書房、339頁、1955年②三好唯義・小野田一幸『図説日本古地図コレクション』河出書房新社、127頁、2004年③京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編『地図出版の四百年—京都・日本・世界』ナカニシヤ出版、133頁、2007年などが挙げられる。
 - 27) 前掲26) ③「Ⅱ日本図の出版」37-38頁参照。
 - 28) 前掲26) ①秋岡著書88-91頁参照。なお、出版図ではなく手書きの地図であるものの、唐招提寺所蔵の「南瞻部州大日本国正統図」（16世紀半ば）にも、陸奥のなかに「夷地」と記されており、その北には「宇曾利」というアイヌ系統の地名が記されている。同じく手書きの地図であるが、龍谷大学附属図書館所蔵の「混一疆理歴代国都之図」（1402年）の日本部分の本州にも「夷地」が記されている。
 - 29) 宮紀子『モンゴル帝国が生んだ世界図』日本経済新聞出版社、2007年、242-245頁参照。
 - 30) 前掲26) 寛文年間に発行された「新改日本大絵図」は、「扶桑国之図」とも題されており、寛文2年の二種、同5年、同6年の出版地図が確認されている。①秋岡著書186頁参照。
 - 31) 前掲26) 「新板日本国大絵図」には、「松前」を「夷狄」と本州の間の島として描いているものも存在する。①秋岡著書212頁参照。
 - 32) 石川流宣の日本図については、前掲26) ①秋岡著書212-216頁②30-31頁、91-96頁③46-55頁参照。
 - 33) 長久保赤水の日本図については、前掲26) ①秋岡著書224-228頁②36-38頁、96-101頁③57-63頁参照。
 - 34) 前掲3) 秋月著書153-154頁参照。
 - 35) 前掲26) ①秋岡著書236頁参照。
 - 36) 前掲26) ③62頁参照。
 - 37) 前掲26) ②46頁図版参照および104頁参照。
 - 38) 前掲26) ②105頁の図版参照。
 - 39) 前掲3) 秋月著書334頁図版参照。
 - 40) 前掲3) 秋月著書331-338頁参照。
 - 41) 前掲26) ①秋岡著書238-239頁参照。
 - 42) 前掲3) 秋月著書362-363頁参照。

※本稿入稿後、高木崇世芝『近世日本の北方図研究』（北海道出版企画センター、2011年）が出版された。合わせて参照されたい。

<ABSTRACT>

Mapping Ezochi : The Cartography and Representation of Japan's Northern Frontier in Japanese maps in the Edo period.

KOMEIE Shinobu

This paper examines the cartography of Japan's northern frontier in Japanese maps in the Edo period. Between the seventeenth and nineteenth centuries, Hokkaido (the northernmost island of Japan) was divided politically into two areas __ Wajinchi, the area for Wajin (non-Ainu Japanese) settlement, and Ezochi, the area reserved for Ainu (indigenous people in Hokkaido) settlement.

The author clarifies how Ezochi was represented on the maps surveyed by the feudal regime (Tokugawa shogunate) and published by private mapmakers and publishers in Edo, Osaka, and Kyoto.

The Matsumae domain controlled both areas until 1869, except for the two periods of direct administration by the Tokugawa shogunate during the Edo period. The shogunate provided corrected maps of Ezochi based on the remarkable survey of the coastlines of Hokkaido by Tadataka Ino during the period of direct control over Hokkaido. Takeshiro Matsuura investigated rivers and mountains in the inland areas of Hokkaido, and published well written and structured maps. A map drawn by Takeshiro 'Hokkaido Kokugun Zu' (A Map of Hokkaido, Kuries, and Sakalin) was published by the Colonization Commission in 1869.

Private mapmakers and publishers in Edo, Osaka, and Kyoto published various colour-printed maps of Japan in the Edo period. Until the eighteenth century, Ezochi or Matsumae castle town was described only as a part of these territories. In the mid-nineteenth century, however, mapmakers drew

the outline map of Ezochi on the printed Japanese map. These maps could be created on the basis of the maps surveyed and investigated by Tokugawa shogunate. Some printed maps, however, have been kept a part of Ezochi or Matsumae in the mid-nineteenth century.

Consequently, the Wajin political power provided accurate maps of Ezochi to that could be included within Japanese territory in the mid-nineteenth century.